平成９年12月８日第３種郵便物認可
令和７年８月31日発行（季刊発行）第168号

HI

HAIKU INTERNATIONAL

2025
No.168

俳句ユネスコ無形文化遺産
登録推進協議会

ヘルマン・ファンロンパイ氏
訪日特集

HI

令和７年８月31日■第168号

Aug. 31. 2025■No.168

目　次　　CONTENTS

	page	
新会長挨拶	2	
『自然との対話』　土井善晴氏講演　2025年６月30日	3	
俳　句		Haiku
HI 選集①カナダ・ヨルダン・日本・デンマーク・ドイツ・アメリカ・スロベニア・内モンゴル	12	HI Club ① Canada, Jordan, Japan, Denmark, Germany, U.S.A., Slovenia, Mongolia
HI 選集②～③	15	HI Club ②～③
HI 選集④（自訳）	25	HI Club ④ （translated by the author）
HI 168号 投句作品より	31	From HI No.168
選評　監事　松尾隆信		Selection and review　HIA Auditor Takanobu Matsuo
俳句の魅力をより多くの人々に　三重県伊賀市長　稲森稔尚（としなお）	34	
ファンロンパイ氏訪日特集	35	
後記	45	

新会長挨拶

皆様ご健勝のことと存じ上げます。

2025年６月30日に行われた俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会総会・国際俳句協会（HIA）総会でHIA会長就任のあいさつをいたしました。有馬朗人前々会長、２月に逝去された大高霧海前会長の遺志を受け継ぎ、俳句のユネスコ無形文化遺産登録実現への決意を新たにした次第です。運動推進のため、財政状況の改善を工夫し、事務局との連絡も密にとっていく所存です。

曽祖父である高濱虚子は1936年に欧州各国を歴訪し、詩人たちと交流。日本の俳句を海外に広める先駆者となったことを思うと、虚子の教えを継承する私が今回、会長となった事にも運命的なものを感じます。

欧州連合（EU）の初代大統領ヘルマン・ファンロンパイ氏が大阪・関西万国博覧会で来日されたのを機に、登録推進のため奔走してくださったのは、今号の特集記事でご紹介した通りです。御宿を通じてスペインと縁のあるファンロパイ氏と同様、私も万博スペイン館を訪れ〈梅雨晴にスペイン日本時差の無く〉と詠みました。これまで「ハポン支倉常長俳句賞」運営に携わり、スペイン、英国、ブラジルなど各国で俳句交流をしてきました。俳句によって世界の人々の心の距離が一層近づくよう努力を続けていきます。

今後共ご理解、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

国際俳句協会会長
星野 高士

『自然との対話』

土井善晴（料理研究家）講演

2025年６月30日　衆議院第二議員会館　多目的会議室

今日は料理の話です。ただ、料理の話といってもふだん皆さんが聞いたことのあるような話じゃないと思います。大体、料理のことを研究している人なんて世界に一人もいない、それくらいに料理というのは当たり前のことでした。あたりまえのものは、一番大切なものです。当たり前にあるものだから、何もそれについて考えることも必要ありませんでした。でも、今は当たり前のものが失われていっているのです。今、私たちは意識して、それを大切にしなくてはならなくなったのです。それは空気や水、家族、そして私たちの「日本」を、守るために改めて今知るべきは、最も当たり前の「なぜ人間は料理するのか？」「和食とは何か？」だと考えています。そうした考えをすすめると、料理から人間を考えることができる、私たちが（自分が）何者であるかがわかるはずです。それは環境危機という大きな問題ともつながります。台所は地球と繋がっているのです。

東アジアの孤島は、雨の多いモンスーン地帯にあります。日本は水に不自由したことがない国です。日本文化はすべて豊かな自然が前提にあるのです。世界中のシェフが日本に来ます。日本には人間活動の原点があるからです。それくらい日本料理は進化してこなかった。だから外国の人からすると「ガラパゴス・ジャパン」なんですよ（笑）。

私が二十歳の時に読んだ『食生活と身体の退化』は、カナダ出身の人類学者であり歯科医師のウエストン・プライスの著書です。プライス博士は、世界中の未開の人々が「文明（食）」と出会う瞬間をフィールドワークしてるんですね。伝統的狩猟や漁労をもとに生活をしていた未開人の村に、「文明食」が簡単に手に入るスーパーマーケットができます。スーパーができる前に生まれた兄と、それ以後に生まれた弟では、骨格、顔形、人格まで、変わってしまう。食が人間を変えてしまうのです。食を選ぶことを知らない、知識をもたない人間は、常に楽な方を選ぶのです。現代の私たちにも同じことが言えそうですね。この本で私は食の怖さを知りました。人間の健全な食である伝統食の大事を知ることになるのです。若かった私には大変ショックでしたが、そのおかげで、後年、手抜き料理、スピード料理などの仕事の依頼は一切受けなかった。今ここで話しているのもそのおかげだと思います。

スイス・フランスでは、ポール・ボキューズはじめ三ツ星レストランやビ

ストロ、郊外のレストランなどで二年間の料理留学を経て帰国しました。日本に帰ったとき、子供のころから住んでいた家の庭や玄関、母がお茶を入れてくれたのですが、そのお湯のみ、久しく会うもののすべてが「なんて美しいんだ」と感動したことを、今も忘れません。外から日本を見ることではじめて本当の日本が見えたのです。しかし、日本料理のことを何もわかっていないということを自覚し、24歳の時に大阪の味吉兆で修行します。30歳になる前、家族に料理学校に呼び戻されました。その後、学校の存続のために大変努力しましたが、時代がそれを許してはくれませんでした。その後独立して、おいしいもの研究所を設立して、メディアや大学などで料理指導しながら活動を始めます。日本から家庭料理を失ってはいけないという気持ちは強く、家庭料理をどう考えればよいかをずっと考えるようになっていました。それまでも、フランスでも日本でも料理は「美」の問題だと分かっていましたから、よく美術館や道具屋にいつも足を運んでいました。そんな時、河井寛次郎記念館で暮らしの美に感動し、家庭料理は民藝だと発見したのです。淡々とした暮らしの中に美しいものが自ずから生まれるのです。フランスでも日本でも、料理屋の仕事は、美を追いかける仕事をしていたと思います。「日本料理は何もしないことを最善とする」という観念が原点にあるのですが、つまり、素材を生かすということは何もしない、形を変えない、色を変えない、味もそのままがよいのです。そういう意味では、ずいぶん、現代の私たちの料理観念は変わってしまいました。かつて私たちは自然と対話し、大自然と共存共鳴して生きていました。しかし料理は工夫、クリエーション、これが人間創造の「進化」だとされているわけです、しかしそれは西洋の観念です。日本の人間創造は「深化」なのです。同じ音でもまったく意味が違います。西洋料理と和食の観念は全く真逆であることを知ることです。それぞれの民族に得手不得手があるのです。

今日は俳句がユネスコの世界無形文化遺産になればとの願いがあると伺いました。和食は10年前ユネスコの世界無形文化遺産の指定を受けています。その指定理由を説明しますと、豊かな自然を背景にする和食は「素材の持ち味を尊重している」「栄養バランスに優れた健康的な食事」「暮らしの行事とともにあるお料理」「四季の移ろいとともにあること（旬を食す）」です。これを観ると分かりますが、この対象としているのは家庭料理です。そして、古来の和食文化を指していることがわかります。だけど、日本のメディアは和食が世界文化遺産に登録された時に、日本の食生活を担ってきたお母さんやおばあちゃんに、だれもマイクを向けなかったんですね。だれも和食の無

形文化遺産の意味を知ろうとしないのは残念です。和食は私たち独自のもの、世界に類を見ないものなのに、残念に思います。

白洲正子が「この国では美しいものは生活と分離したところには生まれてこない」と言っています。日本の美は本来家庭生活から生まれてくるのです。日本から家庭料理を失うわけにはいきません。暮らしの土台となる食事を実現するのが「一汁一菜」です。若い女性は、誰からも教わらなくても、幸せな家庭を作りたいと思うと「料理を頑張ろう」そして、子供ができれば「自分の手料理で子供を育てたい」と無条件に思うのです。これが料理の本質であり、意味だと思います。10年以上前になりますが、「大人の食育」という勉強会を定期的に開いていました。当時は晩ごはんの献立を考えるのが主婦の一番の悩みとなっていたのです。結婚前や子供を持った彼女たちは本当に悩んでいたのです。そこで昔からの基本の和食でもある「一汁一菜」を教えたのです。本当に肩の荷が下りたと彼女たちは大喜びでした。それで『一汁一菜でよいという提案』（新潮社文庫）を書いたのです。人間は料理して人間になったわけです（リチャード・ランガム『火の賜物』）。私は料理をしない人間は問題があるって思っています（笑）。哲学者ハンナ・アーレントの『人間の条件』という本があります。「人間の条件の大前提として、「地球」と「料理」、すなわち家庭での無償の労働なくして人間は人間にならしめません」まさにその通りと思っています。

横尾忠則さん、アンリ・ルソー、中川一政、彼らは誰からも絵なんて習っていない、独学ですね。絵がちっとも上手じゃない。しかし、申し分なくいい絵ですね。それを世界の人が認める。現代の日本人は上手でなければ歌を歌えない、字を書くために教室に通わなければならない、お手本のように上手に書くことが大事だとなっているのです。誰でも絵を描いていい、誰でも料理してもいいということを、私は取り戻したいと思っています。学生に教えているときに思ったのは、この頃の学生は、自分の美意識でモノを選ぶ経験がないのです。100円ショップで用が足りるからです。かつての庶民の暮らしはたいそう美しかった。しかし、今、美しいものを無くしてきたのです。

おいしくなければ料理ではない、料理とはおいしいものを作ることになってしまったのです。その「おいしい」はどこから来たのですか…それは西洋のおいしさです。それも快楽的に脳に直結する油脂のおいしさを、当たり前においしいと言っているのです。しかし、日本の素朴な野菜のおいしさを喜ぶ心とはまったく違う世界です。日本の食というのは、そもそもおいしいものを作ろうとは思っていないのです。

おいしくなければ料理ではないということになると、料理する人は表現者となり、食べる人は評価者・観客になるのです。そこに苦しみが生まれるのです。それはプロの世界では結構ですが、家庭でそんな苦しみは不用です。日本ではおいしいものは、自然、そこにある食材から、生まれてくるのです。それを感じ取ることが和食の楽しみです。自然と人間の関係を料理が媒介しているのです。

コロナの時に、小学生の給食で黙食がかわいそうだ、と話題になりましたが、私は子供の頃は「黙って食べなさい」と言われて育ちました。禅宗の坊さんは黙って食べます。箸の音もいけない。それは自然と向き合う時間だということです。そして一般に言われている「食はコミュニケーションだ」というのは、社会的コミュニケーションの話で、日常の暮らしにあるのは、自然とのコミュニケーションでよいのです。ましてや子供同士のコミュニケーションは休み時間の運動場にあるのです。おいしいの語源は、宮本常一は『忘れられた日本人』で、おいしいは「いとおしい」（なつかしい）だと言っています。その場で一緒に食べた人だけが共有できるものです。視覚や聴覚（触覚）と違って、味覚や嗅覚は言語中枢とつながっていません、人間の自然は実によくできた物ですね。日本の辞書には、食事とは定期的に栄養摂取する、と食べるだけになっています。料理するが抜けているのです。食べるだけなら「野生」、料理する人に「理性」があるのです。理性が野生を制御しているのです。お腹空いたら機嫌悪くなる、酒を飲めば酔っ払う。肉体と精神は平衡しているということです。料理とは無条件に人を思うことです。家族や子供が食べるのでちょっと体裁を整えて、と思うのが人情です。料理する人を大切にしてください。

もう一つ、現在は片付けるというのを忘れています。食事とは「料理して、食べて、片づけ、そうじすること」それで循環するのです。日本はどんどん、高度経済成長しましたが、新しいものを作って、片付けないできているんです。始末をつけていない。地方に行っておばあちゃんに新しい料理を教えてもらうにしても、片付けてからにしてほしい。片付ける、かたづける、即ち秩序を戻す。福岡伸一先生の「動的平衡」でも、養老孟司先生も「エントロピー増大」の法則できちっと片付けて解決し次に進むんだと言っているのです。だから、銀座のビルの中にあった寿司屋でも、片付け、掃除を一番大事にするのです。そのお店は、魚の臭いも酢の臭い、いっさいしないのです。二十年に一度全部新しいものを作る伊勢神宮、これは秩序を戻し、日本の文化を維持してきたんですね。掃除片付けのできないお店は、必

ず滅びるものです。

私たちは、大自然に畏怖し畏敬の念を持ち自然と共存共鳴して生きてきました。自然は常に移ろい変化するもの、絶対同じにはなりません。現代日本の設計主義とか予定調和は一切ないということです。でも人間は、自分で判断して経験を積んで、それが磨かれることによって、予測できるのです。食べる以前に料理を見ただけでおいしいか、すべてわかるのが日本料理です。うちの近所に経済思想家の斎藤幸平さんがいまして、マルクスは「労働（商品を作る）」を人間の物質代謝として資本論を書いたのですが、「人間の物質代謝は料理ちゃいますか」と私が言ったことに対して、「ハッとした」と日経新聞の「交遊抄」に書いてくれました。偉い人だなと思います。

民藝の道具の美しさは、健全な暮らしに自然に生まれてくるのです。この列島では水に不自由したことがないと言いましたが、縄文人は湧水地に住みました。私たちにとって食材とは八百万の神でしたから、すると料理は神様に触れることですから、料理をする前にはきっと手を洗い清めたことでしょう。刺身を「お造り」と言いますが、「造る」と書くのは、人間が作ったものじゃないという意味ですね。私たちは、魚を造るとき、水洗い、鱗と内臓を除いて、血を洗いきれいにして、３枚に下ろして造りにする、加熱しないで、きれいにすることで安心して食べられるようにするのです。私たちは、現代の化学的な衛生管理よりもっと早くから、「浄不浄を区別する」ことで安心安全を守ってきたのです。料理をする人は、手を洗う、右手と左手を区別する、そうじをするものですが、常に「けじめ」をつけて清潔を維持しています。

和食の特徴と言いますか、らしさをつくるトピックスをいくつか話します。

日本人は千年以上前から麹菌を飼ってきました。手なづけることで無菌化したのが日本の米麹（アスペルギルスオリゼ）です。米麹から、日本のすべての調味料はできています。日本酒、味噌、米酢、醤油、味醂、全部そうです。

日本の器は西洋のカップのように持ち手がついていません。手が道具化して直接持つ、身体と道具を直結するのです。そうした自然と身体を一つに結ぶことから、私たちの美意識は生まれてきました。

「きれいきたない」は日本人の倫理観そのものです。日本の「きれい」という言葉は、あの人は嘘のないきれいな仕事をする、柔道などスポーツでも、フェアプレーを重んじる。嘘偽りのない真実・悪意のない善意・そしてそういうところに美が生まれる。つまり「きれい」のひと言で「真・善・美」という人間にもっと大切なことを表しています。

民俗学者の柳田國男が日本人の生活に見出した世界観がケハレです。食事の場（意味）も二つに区別して、ケの日常では、「人間が人間のために料理します」が、ハレの日では、「人間が神様の食べものを作る」のです。「何もしないことを最善とする」という料理の観念は、日常の料理にあるのです。日常では、食べられるものはすべて捨てることなく、大根も皮を剥かずにみんな食べる。それを「一物全体」と言います。

白米やお酒も、ハレの日にいただくものでした。アクを抜くことも、だしをひくことも、皮を剥くこともハレの日の料理なのです。そうした自然と共存する私たちの生活は、おのずから自然を思い、人間を思うという健全なシステムから成るものと考えています。人間は自然の一部です。自然物である人間にとって、日常の料理とは、まさに「自然の摂理」のうちにあるものでしょう。人間は料理する動物だからです。だし文化と言われる所以の澄んだ「お吸いもの」は、ハレの日の話です。昔はケ、日常というのは本当につつましかったのですが、現代人は楽しむことになれていますから、ケの中に「小さなハレ」を取り込みます。それは「料理する」という喜びです。

さて、改めて一汁一菜とは汁飯香、ごはんと味噌汁、それに漬物です。味噌汁を具だくさんにすれば、おかずの一品を兼ねるので、ごはんと味噌汁だけで食事になります。一汁一菜は人間が作ったものではない自然物ですから、飽きるなんてことはありません。味噌汁には、何を入れてもいいんですよ。私なんか、ピーマンの種とか、トマトとか、何でも入れる。野菜で栄養を摂ることは、全部味噌汁に任せていいわけです。そうしたら、「肉を焼く」のは、楽しみになるのです。自分が食べたい、家族に食べさせたいという時だけ、一汁一菜以外の料理をすればいい。それは、心に、時間に、お金に余裕があるときだけでいいのです。

日本はガラパゴスだと言いましたが、それは、和食には物事の始まりの原点があることです。清らかであること、澄ませること、白いこと、生まれたてのものが尊いのです。ごく小さな変化を知るためには、清らかというゼロという環境が大事です。小さな変化もすっきりときれいなもの。何もないというゼロだからこそ、小さな変化も見逃さないのです。それはゼロというコンディションです。私たちは、物事がうまくいかなかったら「すみません」とお詫びしますね（笑）。私たちは毎日生まれ変わって新しくなるのです。

日本の庭園は、これは、本当の自然と違います。こんな不自然な自然ないんです。ハルオ・シラネ氏、コロンビア大学の教授、アメリカ生まれの日本人で日本文化の研究者です。彼は日本文化を見て、余計なものを排除して、

きれいなものを際立てて、花鳥風月を共通観念として記号化したものが「歳時記」だと説明しています（「四季の創造」角川選書）。彼はこれを日本人の作った「二次的自然」と言っています。これは、源氏物語のような屏風のむこうの貴族の暮らしの物語です。これは現代の懐石料理もこういうものになっています。こういった世界にはない自然をおもんばかる「歳時記」は無形文化遺産になるのではないですか（笑）。

物の価値、骨董でもなんでも、日常生活から日本の美意識は生まれています。よごれたもの、枯れたものにも美しいものがある、という幅の広い考え方をするのです。きれいなものばっかりだったら、面白くないでしょう。それは「侘び寂び」とも言えますが、死生観であって、死んでいくところまで美しい。それくらいに、日本人の美意識は深くって、私たちの内生の豊かさを示すものです。

フランスなどのヨーロッパでは、「人間中心主義」で、大自然とは人間が利用して役に立てるもの、自分たちで管理するもの、であると旧約聖書に書かれています。それを持って科学文明は発展しました。その恩恵を日本人も受けているのです。しかし、何もしないことを最善とする私たちの日本の料理では、物を混ぜること、工夫することをよしとしません。日本人のクリエーションはないのかと、本当に悩んでいたのです。その疑問を、生命科学者の清水博先生の勉強会に参加して、先生に尋ねてみたら、日本の人間存在の創造とは、新しいものを造るという「進化」でなくて、自然を深く細やかに感じとる「深化」だと教わったのです。これで、私の長年の疑問は吹き飛んだのです。西洋の人間中心主義に対して、日本は自然中心主義、私たち日本人の自然観は西洋とは真逆です。

日本の彫刻はマイナス的彫刻です。円空は一木から仏様を掘り出した。すでに木の中に仏がいるのです。日本のお造りもそうでしょう。西洋ではプラス的彫刻、粘土を積み重ねて恣意的に造形し鋳型を作ってブロンズ像にする。しかし、人間が新しいものを生み続けるという西洋文化は、環境破壊を生むことになり、すでに行きづまってしまったのです。それは料理の世界も同じです。新しいものは普遍性を持たず、消えてなくなってしまう。おいしいものを求めてきた彼らは科学の国、自然を支配してきた国だから、自然破壊が進み、地球が調子悪くなったら、まっさきに、自然に対する責任を感じて、自然保護の運動をしているのです。日本は、豊かな自然に恵まれているがゆえに、当たり前になって、自然を信じきっているので、自分たちが守らなければならないものという責任感が生まれません。そういう発想が生まれ

てこなかったのです。人類滅亡につながる環境危機に対しても、反応が鈍い、多分多くの人は、仕方がないと思っているのでしょうね。でも若い人のことを思うと、それではいけないと思うのです。

台所は地球と繋がっているのです。そういう意味で、自然を思い、家族の自然を思うことが、人間が料理するところに希望があります。それを実現するのが「一汁一菜」という持続可能な生活スタイルです。

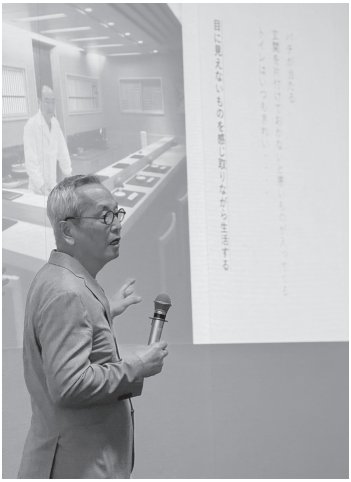
日本の日常の食事を「一汁一菜」でよいと言っていますが、毎日これでいいんですよ。フランスも毎日、家庭では野菜スープとパンとチーズ。こうした日常の食事は発酵食品でできています。発酵食とは自然が造り出したものだから飽きることはありません。これがフランスにおける一汁一菜です。日常の暮らしにそれ以上のおいしいものはいらないというのが、慎ましい暮らしです。しかし、今の私たちは、フランスレストランのような人間が作るおいしさが日本の家庭に入ってきているのです。おいしさを比較し、競う世界ですから、それは苦しみを生むのです。

食事とは、喜びであり幸福です。味噌汁は濃くっても薄くっても、熱くても冷たくても、みんなおいしいんです。味噌にまかせておけばいいのです。一汁一菜は、しっかり健康に生きるためにあります。何を作ろうなんて、考えることも悩むこともない。ご飯さえあれば、味噌汁作って、家に帰って、10分もしたら温かいものが食べられるわけです。これだけで十分、何も問題ありません。実行すれば、健康になります。時間が生まれます。実行すれば、いいことが必ずあります。

食事のよろこびは、料理することが楽しみになることを知ることです。それは、心に、時間に、お金に余裕のあるときに、自分が食べたいもの、家族に食べさせたいものを作ることです。それは自分の意志でする料理です。自分の意思ですることで初めて、楽しみや喜びになるのです。秋になってきれいな秋刀魚を見つけたら、秋刀魚を焼く。栗を見つけたら、栗ごはんを作ってみて下さい。それは喜びでしかありません。このように、「ケ」の日常の中に、楽しみとしての「小さなハレ」は生まれます。人間が自然の一部ですから、ここまでの料理は自然の摂理の中にあると考えられるわけです。そうした考え方の中にある和食の調理は、食べられるようにすることです。ひとつの食材を、一つの調理法で調理する。調理法は、「炙る（焼く）」、「湯がく（煮る）」、「煎る（炒める・揚げる）」、「蒸かす」、「なます（生、塩）」です。味つけは、食べる人の問題で、食べる人自身が、醤油をたらり、塩や味噌をちょっとつけるということで良いのです。

私たちの食事の楽しみや喜びは季節の移ろいに気づくことです。季節の移ろい、それが「もののあはれ」ですね。心にくさびを打つことです。同じ野菜でも、六月半ば初なりの茄子と梅雨明けた後の盛りの茄子をまったく別ものとして味わうのです。新米が出たら、初ものだと喜ぶ。皮をこそげてお芋の煮ころがしを作るんです。そうしたら、芋のおいしさも栄養価もそのまま食べるのです。それを六方にむいて、米のとぎ汁で湯がいて、たっぷりのだしで煮含めるのとは意味が違います。ケの日常の料理に真実があるのです。ハレのきれいにする料理とは別ものです。そういったケハレの違いがあるのです。日常の中にハレのご馳走がまぎれこんで、私たちの料理とは何かを見失ったのです。何がおいしいのかがわからなくなった、自分が何者であるのかがわからなくなったのです。

「雪中の筍」は北斎の絵です。若い男が雪の下から春を掘り出して、持ち帰る。家には、年老いた母親が「寒いさむい」と火鉢にあたっている。そしてお椀の中に小さなタケノコを見つけたら、「ああ、もう春が来る」とお椀の中の春を見つけて喜ぶわけです。私のために息子が、冷たい雪の中に手を入れて、筍を掘ってくれたのです。これが和食の喜びです。おいしいおいしくないということではありません。多摩川を散歩をしていると、春、土手にしゃがみこんで何かをしている人を見つけます。「ああ、土筆が出ているのかな」と、横に並んで、５～６本とらしてもらって、ポケットに入れて持ち帰る。袴を掃除して湯がくと赤くなります。お気に入りの皿に盛り、鰹節と天盛りして、ちょっと醤油垂らす。うち三人の家族がこれ一つです（笑）。これで十分、家族に「春がきたよ」って伝えることができたのです。料理は季節と人間を繋ぎます。夏になったら、初もんのスイカを買ってき、包丁を入れて一緒に食べる。私たちの喜びは自然の移ろいとともにある。これが自然とともに生きて来た私たちの本当の豊かさだと思います。「もののあわれ」は、なにも茶人や詩人俳人の専売特許ではありません。私たち自然と共に生き、内なる自然とむすぶことで喜びを知る。心豊かな文化があるのです。



土井善晴氏
（写真：俳句四季）

—— HI Club —— ①

HRYCIUK, Marshall John Louis（CANADA）
●
lakeshore highrises
shining in pink gold
the whole sunset

WAZWAZ, Issam（JORDAN）
●
A big seashell,
about the sound of the sea;
I'm talking to my little daughter !

LEE, Che-Yu（TAIWAN）
●
Valentine's day －
the epilepsy patient is
in a daydream

HANSEN, Hanne（DENMARK）
●
the lake is frozen
gulls are walking on the ice
in the morning light

DOI, Gisela（GERMANY / JAPAN）
●
Abschlussfeier －
ein Reh entreisst ihr
die Kuchentüte

MOMOI, Beverly Acuff（U.S.A.）
●
everywhere I look
there you are
wild aster

—— HI 選集 —— ①

リチューク，マーシャル　ジョン　ルイス（カナダ）
●
湖畔の高層ビル群
ピンクゴールドに輝いて
全き夕焼

ワズワズ，イッサム（ヨルダン）
●
大きな貝殻
ほぼ海の音
私は幼い娘に語りかける

李　哲宇（台湾）
●
バレンタイン
癲癇持ちの
白昼夢

（自訳）

ハンセン，アナ（デンマーク）
●
凍った湖
カモメが氷上を歩く
朝日のなか

土井，ギーゼラ（ドイツ / 日本）
●
卒業式
鹿にケーキを
奪はれぬ

（自訳）

桃井，ベバリー（アメリカ）
●
あたり一面
どこを見ても
野菊かな

（訳：桃井勝彦）

STOPAR, Rudi（SLOVENIA）
●
fishing on the night
aurora-the northern lights
the fantastic experience

ストパール，ルディ（スロベニア）
●
その夜の夜釣り
オーロラ、北極光
忘れられない体験

MACHMILLER, Patricia J.（U.S.A.）
●
carving air
in silence
the owl's wing

マックミラー, パトリシア　J.（アメリカ）
●
静けさに
空を刻む
ふくろうの翼

Nekhii（Inner Mongolia）
●
Drunken wind
knocking on the door
at midnight

ネヘー（内モンゴル）
●
酩酊の風
真夜中の
ドアをノック

Ya. Tuvshinbayar（Qinghai）
●
A match struck －
the trees whisper
their sorrow

Ya. トゥブシンバヤル（青海省）
●
マッチを擦れば
木々の
涙声

D. Oyuntsetsen（Inner Mongolia）
●
Paths our ancestors took
wide or narrow
the path stays true

D. オヨンスチン（内モンゴル）
●
先人の歩んだ
広狭の道は
真実の道

Bar Bold（Inner Mongolia）
●
The broad daylight
shrouded
in darkness

バー・ボルドー（内モンゴル）
●
白昼は
真っ暗闇に
包まれている

KURODA, Motoko（U.S.A.）
●
admiring cherry blossoms
and carelessly stumbling
over the root

黒田素子（アメリカ）
●
桜花めで
突出の根に
転ぶなり

（自訳）

MONTREUIL, Mike（CANADA）
●
barber's chair
my white hair
a snowfall

モントリール，マイク（カナダ）
●
理髪店の椅子
私の白髪
降り積もる雪

MORTAZAVI, Milani S. Mohsen（IRAN）
●
rain of blossoms
give me a chance for half a glance
the enchanting cherry tree

モルタザフィ, ミラーニ S. モセン（イラン）
●
花の雨
ちょっとだけでも見せて
魅惑の桜木

～ルーマニア大使館にて「俳句の夕べ」のご案内～

オヴィディウ・ラエッキ駐日ルーマニア大使閣下のご厚意により、ルーマニア大使館にて、俳句の交流会を開催いたします。詩の国、ルーマニアでは俳句が盛んです。秋の夕べのひととき、Zoom での朗読でルーマニア語の俳句の響きを、古い歴史のあるルーマニアワインとともに楽しみませんか。

－記－

日時：2025年10月26日（日）午後５時より
会場：駐日ルーマニア大使館
東京都港区西麻布３－16－19（地下鉄六本木駅より徒歩約10分）
定員：30名

＊参加申込は、９月30日（火）迄に国際俳句協会へ。定員になり次第締め切ります。

TEL：03-5228-9004 FAX：03-5228-9007
Email：info_hia@haiku-hia.com

—— HI 選集 —— ②

安原　葉（長岡）
●
畦焼くを見とどけてゐる老一人

渡辺通子（日立）
●
単衣着て帯をほめられ領事館

介弘紀子（福岡）
●
光呼ぶ風は魔術師芒原

佐藤宣子（北海道）
●
朔北の吾の夕影と坂の鷲

齋藤澄子（東京）
●
新米の名は新之助名乗り出し

西邑桃代（京都）
●
小夜時雨屋根に佇む青鷺よ

—— HI Club —— ②

YASUHARA Yo
●
An old man
watching
ridge burning

WATANABE Michiko
●
Draped in unlined kimono;
my *obi* admired
within the consulate

SUKEHIRO Noriko
●
silvergrass field ...
the wind that calls the light
is a magician

SATO Nobuko
●
My evening shadow
in a northern land
and an eagle on the hillside

SAITO Sumiko
●
The new rice
is called Shinnosuke:
it goes forth with this name

NISHIMURA Momoyo
●
A grey heron
perching on a rooftop ...
winter drizzle in the night

岡西宣江（千葉）
●
チャップリンの笑ひに涙いぬふぐり

OKANISHI Nobue
●
Tears
in Chaplin's laughter —
wayside speedwell

草野准子（東京）
●
大寒や湯呑みは両手につつみたる

KUSANO Junko
●
Great Cold —
wrapping a *yunomi* teacup
with both my hands

時田　清（深谷）
●
春ショール大仏様を仰ぎけり

TOKITA Kiyoshi
●
A woman in a spring shawl
gazes up
at the Great Buddha

鈴木帰心（刈谷）
●
水仙や良きこと綴りゆく日記

SUZUKI Kishin
●
Daffodils —
writing all the good things
in my diary

大西政司（愛媛）
●
薄氷を割りつつ歩む通学路

ONISHI Masashi
●
Walking
while cracking the thin ice
the road to school

吉村玲子（三田）
●
潮風に錆びてゆくなり冬薔薇

YOSHIMURA Reiko
●
Rusting away
in the sea breeze:
winter roses

飯川三無（川崎）
●
万葉の野の七草の彩を炊く

IIKAWA Sanmu
●
Steaming rice
with the Seven Herbs'hues
in Man'yo fields

清水みな子（刈谷）
●
公園を抜けて行く人天高し

SHIMIZU Minako
●
One person
walking through the park —
high autumn sky

原田静子（埼玉）
●
東風吹けば輪島の太鼓音聞こゆ

HARADA Shizuko
●
East wind blowing ...
I hear drumbeats sound
from Wajima afar

田代まれすけ（静岡）
●
添水鳴り素知らぬ顔の猿二匹

TASHIRO Maresuke
●
A deer-scarer cracks;
two monkeys with faces
that don't care

佐藤みちゑ（東京）
●
風になり詩人になりて枯野行く

SATO Michie
●
Becoming the wind,
becoming a poet — I cross
the withering field

西田梅女（金沢）
●
降り晴れて風三月の空模様

NISHIDA Umejo
●
Rain or shine
the shifting skies
of windy March

石綿久子（東京）
●
啓蟄や今日は伸び伸び体操す

ISHIWATA Hisako
●
insects awaken —
today I exercise
in a leisurely way

熊谷佳久子（札幌）
●
せめぎ合ふ流水湾を閉ざしけり

KUMAGAI Kakuko
●
ice floes
struggling with each other
close the bay

相沢恵美子（横浜）
●
浅蜊掘背に転がる鳶の笛

AIZAWA Emiko
●
Clam gathering —
a kite's sharp whistle
rolls over my back

權守いくを（神奈川）
●
蠟梅の香り泉下の父母に沁む

GONNOKAMI Ikuo
●
The wintersweet's scent
reaches to my parents
in another world

菊池幸恵（茨城）
●
三月のポップコーンの弾け落つ

KIKUCHI Sachie
●
March popcorn
popping
and falling

船矢深雪（函館）
●
桃の花菜の花雛で祝いけり

FUNAYA Miyuki
●
Celebrating
amid peach blossoms, canola blossoms
and hina dolls

染川清美（大阪）
●
眼の合ひしベランダの鳥や春来たる

SOMEKAWA Kiyomi
●
The bird on the balcony
whose eyes met mine —
spring comes

安富明路（北海道）
●
彼岸会や産みおとす仔馬に母の舌

YASUTOMI Akiji
●
Higan Memorial —
its mother's tongue
on the newborn foal

坂田節子（埼玉）
●
はくれんの天女抱きてほころびぬ

SAKATA Setsuko
●
A magnolia
blooms by embracing
a celestial maiden

逸見真三（千葉）
●
山峡のふるさと深き霧の中

HENMI Shinzo
●
My home nestled
in the mountain gorge
lost in deep fog

福田ひさし（埼玉）
●
見慣れない猫付いて来るおぼろかな

FUKUDA Hisashi
●
Hazy moon —
an unfamiliar cat
following me

菊池恵海（東京）
●
羅漢像笑み百態のあたたかし

KIKUCHI Keikai
●
Warmth:
a hundred different smiles
from the arhat statue

—— HI 選集 —— ③

和田　仁（秋田）
●
恋歌を奏でるピアノ春の宿

新田佐代子（堺）
●
幸せはこんなところに煮大根

北端辰昭（奈良）
●
椰子の島夜半（よわ）に探せり十字星

古郡孝之（埼玉）
●
空っ風母屋の隙間知りつくし

今泉かの子（名古屋）
●
冬日差すドーム白衣の修復士

多佳子（明石）
●
豆撒けど心の鬼は居すわりぬ

—— HI Club —— ③

WADA Jin
●
A piano
plays a love song
spring inn

NITTA Sayoko
●
Happiness
rests here, too ...
boiled radish

KITABATA Tatsuaki
●
On an isle of palms
I search for it by night:
the Southern Cross

FURUKORI Takayuki
●
the cold wind
knows all about the gaps
in the main house

IMAIZUMI Kanoko
●
The winter sun shines
into the *Duomo* — restorers
robed in white

TAKAKO
●
Although the beans are thrown
the devil still lingers
in my mind

露乃草子（静岡）
●
春潮の藍太りゆく父母遥か

TSUYUNO Soshi
●
Indigo spring tide
deepens — far away
my parents rest

三好かほる（埼玉）
●
さえずりや木立の中にゴッホ館

MIYOSHI Kahoru
●
Twittering ...
in the grove of trees
the Van Gogh Museum

草刈幸風（東京）
●
春一番鍍金の剝げた鍼力板

KUSAKARI Kofu
●
A tin plate
with peeled gold plating —
mad March wind

草野章次（浜松）
●
青色の地球消滅原爆忌

KUSANO Shoji
●
Extinction
of the blue earth:
Atomic Bomb Remembrance Day

細川みちえ（愛知）
●
茶の間から眺む白梅外は明し

HOSOKAWA Michie
●
White plum blossoms
viewed from the living room;
it's bright outside

筒井慶夏（沖縄）
●
剪定や垣に麒麟と小熊生れ

TSUTSUI Keika
●
Pruning —
a giraffe and a bear cub appear
in the hedgerow

神山姫余（栃木）
●
相席は巳年生まれの初日の出

KAMIYAMA Himeyo
●
Sharing a table
with the first dawn,
born in the Year of the Snake

児玉星流（長野）
●
89秒最後の警告落ちるつらら

KODAMA Seiryu
●
The doomsday warning
ticks to 89 seconds —
falling icicles

相沢正志斎（水戸）
●
百本の紐の長短吊るしびな

AIZAWA Seishisai
●
Short and long
of a hundred strings:
hanging hina dolls

田中あき子（東京）
●
春ひと日ランチ無料の手話講座

TANAKA Akiko
●
A sign language class
with a free lunch
spring day

川口比呂人（鎌倉）
●
花散るや介護施設の窓に顔

KAWAGUCHI Hiroto
●
Falling cherry blossoms —
a face peeks out of the window
of the nursing home

椙原夢乃（周南）
●
虹の下デフリンピックへ手話の花

SUGIHARA Yumeno
●
Under the rainbow
the blossoming of sign language
at the Deaflympics

鈴木慕南（東京）
●
入試終え廊下走りし子等無敵

SUZUKI Bonan
●
The entrance exam ends...
children run down the hallway
invincibly

宮田　勝（石川）
●
願掛けの松の瑞木の雪払ふ

MIYATA Masaru
●
Brushing snow
off the young pine branch
in prayer

井坂　宏（東京）
●
ぶらんこを漕ぎて富士山蹴り上ぐる

ISAKA Hiroshi
●
Swinging on a swing
and kicking at
Mt. Fuji

矢野真緋子（広島）
●
ゴッホ館万の木の芽のわめくなか

YANO Mahiko
●
Van Gogh Museum
amid countless leaf buds
shouting

桂　香（函館）
●
春風や争いの無き世の平和

KEIKA
●
Spring breeze —
peace in a world
without strife

西倉ムツ子（埼玉）
●
永らへて一人遊びの芹を摘む

NISHIKURA Mutsuko
●
Having lived long,
picking Japanese parsley
just for my own joy

月城花風（東京）
●
突然の訃報に曇る雛の顔

TSUKISHIRO Kafu
●
Clouded
by sudden tragic news
the faces of *hina* dolls

上村凡次（函館）
●
夏の夜や話の付きぬクラス会

KAMIMURA Bonji
●
Summer evening —
no end of talking
at our class reunion

髙橋紀美子（神奈川）
●
庄内の白き土塀や山桜

TAKAHASHI Kimiko
●
White earthen walls
in the Shonai region —
mountain cherry blossoms

菊池熱海（東京）
●
復興の土の匂ひや初蝶来

KIKUCHI Nekkai
●
The smell of soil
during of reconstruction —
the first butterfly arrives

永井玲子（神奈川）
●
父の日やトラックの絵のカーキ色

NAGAI Reiko
●
Father's Day —
a painting on the truck
is the color of khaki

（HI 選集①～③
村上博幸訳）

（HI club ①～③
Translation by
Hiroyuki Murakami）

—— HI 選集 —— ④

悟（愛知）
●
小鳥来る日本で老いし犀の背ナ

陽　二（西蒲田）
●
秋朝餉蜂と一緒に蜜やジャム

結菜やよひ（神奈川）
●
脱走の猫屋根の上十三夜

望月吉々（北海道）
●
川凍る待ってましたと獣跡

チョウコ　ビーン（熱海）
●
晴れ渡る南半球大旦

小泉裕子（岐阜）
●
初場所や投げて阿修羅の貌残す

—— HI Club —— ④

SATORU
●
Small birds come –
the back of a rhinoceros
grown old in Japan

YOJI
●
autumn breakfast
eating with honey and jam
a bee was attending

YUNA Yayohi
●
An escaping cat
on the roof
the thirteenth night

MOCHIZUKI Yoshi-yoshi
●
Pet rupus
Toyotere!
Cikoykip apkas ruwe

BEEN Choko
●
clear sunny
southern hemisphere
New Year's day

KOIZUMI Yuko
●
first sumo tournament –
his asura's face remains
even after throwing his opponent

松山芳彦（埼玉）
●
エントリにロゼッタストーン英の冬

MATSUYAMA Yoshihiko
●
Rosetta Stone —
at the entrance
winter in England

末永玲子（北海道）
●
老いの松わらに包まれ冬支度

SUENAGA Reiko
●
old pine
wrapped with straw
preparing for winter

工藤眞一（東京）
●
春きざす土竜の小塚連なりぬ

KUDO Shinichi
●
Des Frühlings Anzeichen —
Die kleinen Maulwurfshaufen
reihen sich aneinander

宮川　夏（東京）
●
人生のスイッチバック冬薔薇

MIYAGAWA Natsu
●
Winter Rose
a life's
switchback

山田由紀子（静岡）
●
眠る母春の香りの枕花

YAMADA Yukiko
●
beside Mom's bed
a basket of funeral flowers —
scented spring

羽野泰子（大分）
●
屋根裏に空の鳥籠春浅し

HANO Yasuko
●
An empty birdcage
in the attic —
early spring

川原千秋（東京）
●
多言語の溢るゝ今日の花の宴

KAWAHARA Chiaki
●
Be beautiful today
Be filled with a variety of languages
A cherry blossom party

池田松蓮（東京）
●
山藤のさかり落石除けの網

IKEDA Shoren
●
Por la malla
de una ladera rocosa
trepa la glicina montesa

山戸暁子（堺）
●
美術館鉄扉閉ざして春浅し

YAMATO Akiko
●
Die Museumstüren
aus Eisen fest verschlossen,
im Vorfrühlingslicht

永井弘子（茨城）
●
だれも来ぬところまで来て花見かな

NAGAI Hiroko
●
I am going out
to enjoy the cherry blossoms
in a place no one comes

小松　萌（横浜）
●
愛の日や港のベンチ満席に

KOMATSU Moe
●
On the day of love,
the benches at the harbor
are fully occupied

白根順子（埼玉）
●
梅の香や闇ゆるやかに艶めける

SHIRANE Junko
●
The rich scent of ume blossoms
gradually spread
over the spring darkness

西川盛雄（熊本）
●
寒鴉黒の語り部倫敦塔

NISHIKAWA Morio
●
winter crow!
A black story-teller of
London Tower

ヘンリー殿様（東京）
●
逝く春のしじまに鎮む知覧かな

HENRY Tonosama
●
Printemps passant!
la base de kamikaze
se couche dans le calme

祚　胤（函館）
●
病むことは奇跡のチャンス風光る

SOIN
●
getting sick is
a chance for a miracle to happen
shining wind

幸　湖（滋賀）
●
ほほ笑みは世界共通春の風

KOUKO
●
Le sourire est commun
à tous les pays
la brise printanière

久永小千世（知立）
●
花万朶子に抱かれて終の旅

HISANAGA Sachiyo
●
Cherry blossoming
being held in his family's arms
homewards — his last journey

山本浪子（川崎）
●
南蛮屏風訪ふリスボンは春嵐

YAMAMOTO Namiko
●
the spring storm in Lisbon —
the Nanban Byobus are
in front of me

中村和江（深谷）
●
菜の花忌雲に予感の新時代

NAKAMURA Kazue
●
Nanohana Anniversary
in one cloud
the premonition of a new era

春木小桜子（大阪）
●
若人のピアノ演奏春疾風

HARUKI Saoko
●
The young performer on the piano
is like a blast of wind
in spring

各務恵紅（岐阜）
●
石垣に蛇眠らせて城の冬

KAKAMI Keiko
●
Letting a snake sleep
in a stone wall —
winter castle

天野松男（福岡）
●
新玉ねぎ純白ドレス纏ひけり

AMANO Matsuo
●
fresh onions
in pure white gowns
dressed

清水京子（名古屋）
●
竹林にはや整ひし初音かな

SHIMIZU Kyoko
●
In the bamboo grove
the first voice of a warbler
already well-tuned

竹うち悦子（神奈川）
●
玉砂利の音の濡れゐる春夕焼

TAKEUCHI Etsuko
●
the sound of stepping
on gravel is wet
— spring sunset

毬矢まりえ（東京）
●
木枯らしの夜のラジオよりわかれ唄

MARIYA Marie
●
heart break song
from the radio
— wintry windy night

小野香久子（東京）
●
春どっと殊に辛夷に光満ち

ONO Kakuko
●
spring broke out
the magnolias especially
reflecting light

岡　哲夫（和歌山）
●
冬の夜の北海道へ長電話

OKA Tetsuo
●
on a winter night
making a long phone call
to Hokkaido

石澤幸子（京都）
●
ショーウィンドウの服もお菓子も桜色

ISHIZAWA Sachiko
●
clothes and sweets
in show windows
being full of SAKURA colour

内村恭子（東京）
●
春日濃し下町に売るピカソ風

UCHIMURA Kyoko
●
bright spring day
a Picasso-like painting
is sold downtown

（HI 選集④自訳）

―HI 168号 投句作品より / From HI No.168―

【選評】

HIA 監事　松尾隆信

Selection and review by Takanobu Matsuo, HIA Auditor

■第 1 位■

菊池幸恵（茨城）/ KIKUCHI Sachie

三月のポップコーンの弾け落つ

March popcorn / popping / and falling

（評）ポップコーンの弾みと春の喜びが一体となって弾ける。元来、ポップコーンは加熱だけで爆裂するトウモロコシの品種名。　それをポップ（加熱）することでスナック菓子のポップコーンに変身するのだ。また、「三月の」の「の」が英語では不要なので、三歳の童子でも表現できるような、より単純明快な楽しい表現になっている。

Here the popcorn and springtime joy are bouncing together. Originally, popcorn the name of a variety of corn that explodes when heated. Popping（heating）transforms it into the snack food popcorn. Also, Japanese, “sangatsu no” becomes just “March”, without “of” or “in” in English translation, which makes the expression simpler, clearer, and funnier. Even a three-year-old child can enjoy the expression.

■第 2 位■

川口比呂人（鎌倉）/ KAWAGUCHI Hiroto

花散るや介護施設の窓に顔

Falling cherry blossoms － / a face peeks out of the window / of the nursing home

（評）散る花をしばしたたずんで眺めていたのだ。ふと見上げた介護施設の窓に、こちらを向いている顔があった。介護施設の窓の顔の人と作者とが、散り行く花を眺める一瞬の時を共有し合ったような気持になったのであろう。

The author is standing still for a moment watching the cherry blossoms fall. When he looked up, he saw a face peeking out of the window of the nursing home. It was as if the person in the nursing home and the author shared a moment.

■第 3 位■

池田松蓮（東京）/ IKEDA Shoren

山藤のさかり落石除けの網
Por la malla / de una ladera rocosa / trepa la glicina montesa

（評）落石除けの網は、高速道から山中の細い道までいたるところに見られる。落石をも厭わず山中を切り削った傷跡である。その傷跡とも言える場所の近くに山藤が、さかりの美しい花房を風にそよがせて匂っている。やさしく揺らして吹く風のささやきは、英語・ドイツ語ではなくて、スペイン語が似合う。

Rockfall nets can be seen everywhere, from highways to narrow mountain roads. We can say those are the scars of the mountains, where humans cut through the earth, taking the risk of the falling rocks. Near those scars, a beautiful cluster of wisteria flowers is blown in the wind, and the scent of the flowers is in the air. The sound of Spanish, not English or German, fits the whispers of the wind gently swaying and blowing.

■第 4 位■

HANSEN, Hanne（Denmark）/ ハンセン , アナ（デンマーク）

the lake is frozen / gulls are walking on the ice / in the morning light
凍った湖 / カモメが氷上を歩く / 朝日のなか

（評）日本語の訳では、凍と氷の重なりが少々気になるが、原句では the lake is frozen が全体を包んだ表現になっていて気にならない。凍湖の緊張感の中に朝日が差し、一気に明るくなった中での、カモメ等の躍動感と開放感がいきいきと伝わってくる。北欧、デンマークの寒さが伝わってくる。

In the Japanese translation, the overlap of the words “frozen” and “ice” is a bit distracting, but in the original, “the lake is frozen” encompasses the whole expression and is not bothersome to the readers. The tension of the frozen lake is suddenly brightened by the morning sun, and the seagulls and other birds in this scene is vividly expressed in their dynamism and openness. The coldness of Scandinavia and Denmark can be felt.

■第 5 位■

逸見真三（千葉）/ HENMI Shinzo

山峡のふるさと深き霧の中
My home nestled / in the mountain gorge / lost in deep fog

（評）山峡の奥深くあるふるさとへと、濃霧の中を帰郷中の句であろうか。しかし、この句からは、作者のふるさとへ向かっている動作、心の動きは感じ取れない。父母兄弟、そして墓すらもなくなってしまった、遠くなってしまったふるさととの距離を感じさせる。現代人の深層の心の風景のようだ。

This may be a haiku about returning home in a thick fog to a hometown deep in the mountain gorge. We cannot sense any movement of the author's heart toward his hometown in this haiku. Yet, we feel the distance from the hometown, where the author's parents, siblings, and even the grave are gone. It seems to be a scene from the depths of modern people's hearts.

＊ HI 投句作品の選評は、HIA 役員が順番に担当します。
＊ HIA directors will take turns in the selection and review of the haiku.

〈俳句ユネスコ登録推進協議会加盟自治体首長エッセイ〉

俳句の魅力をより多くの人々に

三重県伊賀市長　稲森稔尚（としなお）

三重県北西部に位置する伊賀市は、東西交通の要所であったことから、古代から多くの人や物が行き交い、さまざまな文化が伝えられ、育まれてきました。そうした環境にあって生まれたのが俳聖　松尾芭蕉です。市民は親しみを込めて「芭蕉さん」と呼んでいます。

市内には、芭蕉さんが幼少期を過ごした史跡芭蕉翁生家や松尾氏ゆかりの萬壽寺、門人・友人と訪ねた新大仏寺や兼好塚など、芭蕉さんにゆかりの場所が数多く残っています。また、芭蕉さんの俳句を刻んだ句碑も80基以上点在しています。

このほかにも、伊賀市では色々なところで芭蕉さんに出会えます。例えば、市内を走る伊賀鉄道では、毎年夏に車内に伊賀焼の風鈴を飾った「伊賀焼風鈴列車」を運行していますが、その風鈴の舌（ぜつ）には、芭蕉さんの俳句が書かれています。また、和菓子や日本酒、珈琲、農作物など、芭蕉さんや芭蕉さんの俳句にちなんだ名前がつけられている商品もたくさんあります。

もちろん俳句にも幼い頃から親しんでいます。伊賀市では毎年、芭蕉さんの命日にあたる10月12日に芭蕉祭を開催しています。この芭蕉祭では、「芭蕉翁献詠俳句」として、芭蕉翁に捧げるための俳句を世界中から募集し、特選・入選作品は『芭蕉翁献詠句集』に掲載されるほか、芭蕉祭の当日は、芭蕉翁を顕彰するため上野公園内に建てられた俳聖殿の前で表彰しています。伊賀市のこどもたちには、保育園・幼稚園の頃から、「芭蕉翁献詠俳句」に参加してもらっています。「児童・生徒の部」の締め切りが夏休み明けということもあり、句集には毎年、楽しそうな夏休みの思い出を詠んだ句がたくさんならび、ほほえましい気持ちになります。

当然、最初のうちはこどもがつぶやいた内容を、まわりの大人が５・７・５に直すという感じになりますが、小学生になると自分で文字が書けるようになり、知っている言葉も増え、５・７・５のリズムも心地よく感じられるようになります。この俳句作りは、語彙力や表現力、観察力、想像力、感性や自然への関心など、こどもたちの様々な力を育ててくれています。また、生活そのものを豊かにしてくれる効果もあります。

このような素晴らしい文芸を、世界中のより多くの人に知ってもらい、親しんでもらえたら、芭蕉さんのふるさと伊賀市として、これほど幸せなことはありません。ぜひとも俳句のユネスコの無形文化遺産登録を実現できるよう、今後とも尽力して参ります。

2025年５月
ヘルマン・ファンロンパイ氏訪日特集

日 EU 俳句交流大使である俳人ヘルマン・ファンロンパイ氏（EU 初代大統領）が2025年５月に来日された。今回の訪日の目的のひとつは、俳句ユネスコ登録への足掛りとなる国内の無形文化財登録へのさらなる進展のため、文化財を管轄する文化庁を訪問し都倉俊一長官と面会するためであった。

ファンロンパイ氏は、文化庁訪問の数日前には、岸田文雄前総理大臣（俳句のユネスコ無形文化遺産登録を目指す議員連盟〈通称「俳句ユネスコ議連」〉会長)、盛山正仁氏（前文部科学大臣、俳句ユネスコ議連前事務局長)、仁木博文氏（厚生労働副大臣、俳句ユネスコ議連）らと面会された。岸田氏は10年ほど前にファンロンパイ氏を日 EU 俳句交流大使に任命し、今日まで継続している。

文化庁表敬訪問の際は、国際俳句協会、俳句ユネスコ登録推進協議会の各会長・事務局長らとともに、作曲家でもある都倉俊一文化庁長官と会談した。ここでファンロンパイ氏は、俳句は自然との融和、普遍的価値観などに根付いたもので、その精神は世界平和にもつながり現代にこそ必要とされると述べた。さらにこの短詩型は、母国ベルギーをはじめ世界中で詠まれていると伝えた。また俳句ユネスコ登録の発起人のひとりである故有馬朗人氏の遺志を継いで、俳句を無形文化財登録へさらにはユネスコ登録へ導きたいとの思いを吐露した。一方、都倉長官は、国内での無形文化財登録の先にユネスコがあるが、ファンロンパイ氏のような国際人が俳句交流大使の任に当たられていることに敬意を表し、この面会を機に文化財登録への検討を最優先課題として取り組みたいと語った。

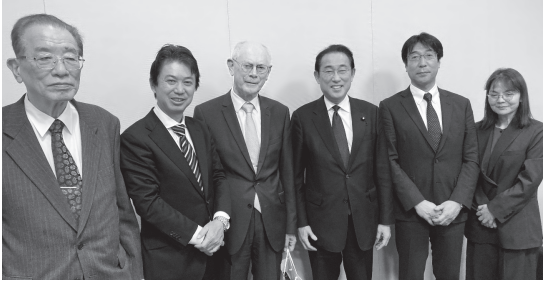
文化庁の調査が進んでいる中、ファンロンパイ氏の長官表敬訪問は、無形文化財登録への大きな励みとなった。

（木村聡雄（としお））

5月15日　岸田文雄前総理表敬訪問

ヘルマン・ファンロンパイ氏は、5月15日、羽田空港に到着し、その足で岸田前総理大臣を表敬訪問した。自治体代表として荒川区長滝口学氏、俳句ユネスコ登録推進協議会会長能村研三、他数名が随行。今回の訪日は大阪関西万博へのベルギー代表団としての参加と併せて俳句のユネスコ登録推進が目的であると表明。俳句のユネスコ登録の前提である無形文化財登録への国内手続きへの理解を示しつつ、俳句が持つ「調和」や「平和」へのメッセージ性が戦争の脅威を感じる現代社会に大きな意味を持つと強調した。

岸田前総理は、ファンロンパイ氏の俳句に対する情熱と継続的な貢献に深く感謝を示し、俳句が国際社会における分断や対立を和らげる文化的力を持っていると氏の訪問を歓迎され、関係者一同が俳句を通した国際文化交流と平和への貢献を共通の目標とし、今後も協力していくことで一致した。



（能村研三）

5月19日　都倉俊一文化庁長官表敬訪問

5月19日、ヘルマン・ファンロンパイ氏は、都倉俊一文化庁長官を表敬訪問した。前週の岸田前首相訪問について触れ、盛山前文科大臣とも無形文化遺産登録について会談したと述べた。俳句は自然に対するハーモニー、バランス、普遍性、など多様な価値観を表現しており平和とも密接に関わると強調した。また俳句が国際的に既に認知されていると述べ、例としてベルギーの日本大使館で行われた小学生の俳句コンテストに現地の80校が応募したことなどを挙げた。最後に、故有馬朗人元文部大臣の代わりとして、俳句への都倉長官の応援をいただきたいと述べた。

これに対し、都倉俊一長官は、言葉が溢れている現代、作曲家である自身も、歌詞の簡潔さや間が大切であると思う、また日本の精神ともいえる俳句を、ファンロンパイ氏のような国際人が関わり使者となっていることに敬意を表したい、と述べた。また、文化庁がどのようなスキームで進めてゆくべきなのか、これを機にスピードを上げ、最優先事項として共に進めてゆきたい、と述べた。

（星野　愛）

▼愛媛新聞2025年５月20日朝刊

俳句を文化遺産に

EU初代大統領ら 文化庁長官に要望

文化庁で俳句のユネスコ無形文化遺産登録に向けて要望したヘルマン・ファンロンパイEU初代大統領（左から4人目）ら＝19日午後、東京・霞が関

俳句愛好家で松山市の特別名誉市民のヘルマン・ファンロンパイ欧州連合（EU）初代大統領らが19日、東京・霞が関の文化庁で都倉俊一長官と面会し、俳句の国連教育科学文化機関（ユネスコ）無形文化遺産登録に向け、国無形文化財への早期登録を求めた。

「俳句のユネスコ無形文化遺産への登録を目指す議員連盟」代表で同席した塩崎彰久氏（自民党、衆院愛媛1区）によると、都倉氏は「最優先事項として加速させたい」と明言した。

塩崎氏の説明では、無形文化財に登録されればユネスコへの申請につながる。2024年から文化庁の調査が進められている。

日本EU俳句交流大使も務めるファンロンパイ氏は「俳句は国際的にも高く評価されている」と強調。出身国ベルギーでは俳句コンテストに80の小学校が参加し、スペインには俳句愛好者が200万人いると例示し「過小評価すべきではない」と述べた。ロシアによるウクライナ侵攻が続く中「俳句の平和のメッセージを広げることに意義がある。私が生きているうちに、できるだけ早く成し遂げたい」とも語った。

塩崎氏は「短い文章の中に自然への思いを織り込む俳句には、人間の善の部分が映し出される。松山の誇る文化を世界に広く知ってもらうためユネスコ登録を目指したい」と話した。

面会には、国際俳句協会の星野高士会長ら俳句関連団体の代表者も参加した。

（二宮京太郎）

▼千葉日報2025年５月18日朝刊

千　葉　日　報（日刊）　2025

御宿の句会で親睦深め

「俳句好き大統領」ご満悦

初代EU　ファンロンパイさん

日本発祥のカルチャー、俳句の愛好者として知られる元ベルギー首相で欧州連合（EU）初代大統領（欧州理事会議長）のヘルマン・ファンロンパイさん(77)が17日、御宿町で開かれた句会に参加し、町の愛好者らと親睦を深めた。

俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会の名誉顧問を務める同氏は、ベルギー代表団として大阪・関西万博に訪れるため来日。公務の合間を縫い、３年前にも参加した同町の俳句団体「若菜会」（会員38人）の特別句会に足を運んだ。

句会に参加し愛好者らと親睦を深めるファンロンパイさん＝17日、御宿町

関係者によると、同氏は11年ほど前、EU本部のあるベルギーの首都ブリュッセルで開催した俳句のシンポジウムで、若菜会会長の岡西宣江さん(90)と知り合い、交流してきた。

千葉工大御宿研修センターで開かれた特別句会で、選者を務めた同氏は英訳された俳句からシンプルさとコントラスト（対比）、擬人化を基準に特選と入選の計10作品を選んだ。

俳人の高浜虚子のひ孫、国際俳句協会会長の星野高士さん(72)＝鎌倉虚子立子記念館館長＝も若菜会で２カ月に１度、講師を務めている縁で出席。国際的な２人の“巨匠”が参加する句会に、岡西さんは「光栄の至り」と喜んだ。

ファンロンパイさんは「（江戸時代に御宿の岩和田地区の住民が、難破船の乗組員ら300人以上の命を救ったという）感動的な史実がある町に、また来られてうれしい。町の人の人間性や寛容性が表れている」と振り返った。

▼産経新聞2025年５月21日朝刊

「俳句の心は世界平和につながる」

EU初代大統領が句会参加

御宿

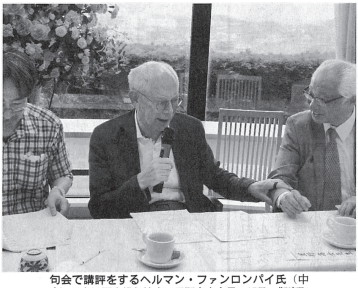
俳句愛好家として知られるEU（欧州連合）初代大統領のヘルマン・ファンロンパイ氏が17日、御宿町で開催された句会に参加し、事前に集められた俳句の講評をした。同氏は大阪・関西万博のベルギー代表団として来日した。国際俳句交流協会会長を務め、交流のあった元東大総長、有馬朗人氏（故人）が縁のあった土地と聞いて訪れた令和4年以来3年ぶりとなる。（鈴木貴之、写真も）

ファンロンパイ氏は、事前に集められ英訳された70句の中から特選10句を選び、講評した。直感的に選び、そこから理由を考えたという。選出の基準として、シンプルさ、コントラスト、擬人化を重視したと説明し、一句一句に丁寧な感想を述べた。

特に擬人化の面白さを強調し、特選の一つ「大仏の背より広がる暑さかな」という句に対して、「当然ブッダは汗をかかないが、人間が汗をかいているように思わせる。そこに想像力の成果がある」と講評した。また、「戦禍の子暗き瞳に春遠く」という句には、「子供は、恨みではなく幸せな目を持つべきである。春は、新しい生命の始まりであるのに反対のものが描かれている。深い意味がある」と平和への思いを口にした。

自分にとっての俳句とは、という質問に対し同氏は「美であり注意である。自然など自分以外のものに注意を向ける。エゴではなく自分以外のものを尊重する。その心が世界平和にもつながる。それが俳句の良さだ」と述べた。

もう一人の選者を務めた国際俳句協会の星野高士会長は「俳句は国際的な存在になっている。ファンロンパイ氏がどういった句を選ぶか、日本人の俳句を世界に広げる意味でも面白い現場になった」と意義を強調した。



句会で講評をするヘルマン・ファンロンパイ氏（中央）。右は国際俳句協会の星野高士会長＝17日、御宿町

ヘルマン・ファンロンパイ氏 1947年、ベルギー生まれ。ベルギー首相などを経て、2009～14年、EU大統領を務めた。句集を出版するなど俳句愛好家で、日本欧州俳句交流大使でもある。平成27年に旭日大綬章を受章した。

千葉

千葉総局
〒260－0013
千葉市中央区中央
4－17－3
電話 043・225・2171
FAX 043・226・1782
chiba@sankei.co.jp
広告 043・202・8600
購読申し込み・配達・集金
0120・34・4646
紙面・記事
0570・046460
Web
https://www.sankei.com/region/

（22日）
旧4月25日
《仏滅》

5月16日　ファンロンパイ氏を感動させた日本の歴史

藤原善晴

俳人であり、俳句のユネスコ無形文化遺産登録を強力に推進しているヘルマン・ファンロンパイ氏は、日本の文化全般や歴史にも関心が深い。同氏が大阪・関西万国博覧会のために来日された期間中に、筆者は5月16日、小田原・箱根への日帰り旅行に同行する機会があった。その際、「改めて日本の歴史上の人々の人道的な行いや倫理・思想に感動した」と語って下さった。東京から小田原駅に向かう新幹線車中で、ファンロンパイ氏から、「2022年に千葉県御宿に行った時、あなたが教えてくれたヒューマン・ストーリーをもう一度教えてほしい。明日句会で再訪するので」と頼まれた。

そこで、約400年前にスペイン領フィリピンからメキシコに向かう途中の帆船が難破し、千葉県御宿の海岸で住民らが300人以上の乗組員を救助したこと、この人道的な行いのおかげで、日本が不平等条約に苦しんでいた明治時代、メキシコが西洋諸国として初めて、平等な友好通商航海条約を結んだことなどを説明。同氏は「すばらしい」とうなずきながら聞いていた。

御宿での人命救助から始まった日西の関係は、仙台藩主・伊達政宗による支倉常長ら遣欧使節の派遣に発展。2011年の東日本大震災を経て、日西間の「ハポン支倉常長俳句賞」を通じた俳句交流にもつながった。俳句賞第3回ではファンロンパイ氏の句集も副賞にご提供いただいている。

ファンロンパイ氏は翌17日、御宿を再訪した後、24日に万博のスペイン館を訪れた。そこに展示されていたのは、支倉常長らが乗ってメキシコへ向かった帆船サン・ファン・バウティスタ号の模型や、御宿での救助の様子を描いた絵など。同氏は展示を熱心に見た後、「私が2度訪れた御宿」それは「日西の人々の温かい関係の象徴」などと記帳した。

ファンロンパイ氏は、16日の小田原訪問では別の感動を味わった。江戸末期に活躍した二宮尊徳（金次郎）を祀った報徳二宮神社や隣接する博物館を草山明久宮司の案内で見学。尊徳が俳諧をたしなんでいたことも知った。尊徳の教えを後世の人が解説した言葉「経済なき道徳は戯言（たわごと）であり、道徳なき経済は犯罪である」を聞き、ファンロンパイ氏は「現代世界において非常に重要な思想だ。江戸末期にそんな人物がいたとは」と評し、「尊徳についてもっと読みたい。尊徳が詠んだ句についても知りたい」と興味津々だった。

5月17日　ファンロンパイ氏に通訳同行して
―御宿若菜句会訪問記

小野裕三

千葉の御宿での句会に参加するファンロンパイ氏。その彼に、通訳として同行することになった。行きの特急列車の隣の席に座り、質問をしてみる。

「そもそも、どういうふうに俳句に出会ったんですか？」

「いやそれはね、まったくの偶然なんだよ」

曰く、あるパーティの席で、彼が卒業したルーヴェン・カトリック大学の同窓生と同じテーブルになった。その人がhaikuを作る人で、句集を手渡された。そのときには興味もなく、自宅の本の山の上に積んでおいた。それから数年して、その本を手に取って読み始めた。特に理由もなくなんとなくその本を手に取ったことが、彼にとってのhaikuの始まりになった。

特急列車が御宿に到着すると、御宿の俳句会「若菜会」の約四十人から大歓迎を受ける。そうして始まった句会（講師は星野高士氏）で、彼は冒頭に、自分がどのように句を選んでいったかの方法論について語った。

最初は、約七十句ある全句を読む。それから自分が「好き」と感じる十句を直感的に選びとり、その後で、なぜ自分がその句を「好き」と思ったのか、という基準（criteria）について考えた、という。

「私にとっての基準は三つありました。簡潔さ（simplicity）、対照（contrast）、擬人化（personification）、の三点です」

簡潔さとは、言葉、観察、思考、などの点において簡潔であることだ、とする。対照についても、彼が例句として挙げたものは五感の対照（例えば触覚と視覚の取り合わせ）であったり、社会的な出来事だったり、と幅広い視点が見られた。また擬人化については、蛙の表情を人間に喩えるなどいくぶんユーモラスな内容のものも含めて、彼は自身の気に入った例句を示した。

句会の最後に、彼は自身の俳句観について語った。俳句の特徴として彼が以前から強調しているのは、自然などを観察して描くことで、意識の力点（attention）を自分ではなく自分の外に向けること。そのような心のあり方や、穏やかで澄んだ心。それこそが俳句を作りだす心のあり方だとする。

そしてそのような心は同時に世界平和に必要な条件であり、それゆえに「俳句を作る心は、世界平和に貢献する」と彼は主張する。突拍子もない夢想とすらも思えるが、ノーベル平和賞をEU代表として受賞した経験を持つファンロンパイ氏が真顔でそのことを語る姿には、リアルな重みを感じた。

※「週刊俳句」944号より要約し転載

〈特別寄稿〉

「存在」にふれる詩　── 共生と平和へ向けて

岩岡中正

2025年５月末発行のHI誌167号に掲載されたファンロンパイ氏の「ハイク・パーク」についての後記を読んでひとこと記すことをお許し下さい。私が注目し共感するのは、北海を臨む国境の小村（カドザンド村、ネーデルランド）の俳句公園に掲げられた、ファンロンパイ氏による「俳句とは」というパネルである。

①俳句とは ── 滑稽と写生

ここで氏は第一に、俳句とは、その源流である「俳諧」のような「陽気な詩」であると同時に、「写真の印象を言葉にしたもの」だと言う。この「滑稽」と「写生」が俳句だという指摘は、俳句の本質を端的に示している。

②俳句と「存在」

第二に私は、氏が「俳句とは、存在を体験すること」であって、「それは言葉では表現できないが、言葉で示唆することはできる」と言っておられる点に注目する。私はここで「存在」という言葉に出会って驚き喜んだ。つまり、一人の人間もこの宇宙の「存在」のひとつとして他の「存在」一切に触れ関わってできるのが俳句だからである。つまり万物の「存在の鎖」（chain of being）ないし「存在の絆」の中で私たちは触れ合って生き、その歓びを詠むのが「俳句」だというこの考えは、本質的で正しく、新鮮。これは、「存問」のことである。

③俳句という短詩の力

第三に、このパネルには、「俳句は音節が少ないほど　強くなることもある」と書かれているが、それは超短詩形の強みのことである。つまり俳句に限らず表現はすべて短いことを良しとするが、とりわけ短い詩形の「即物の詩」である俳句には、「存在」の本質を手づかみにし、より強く深く感動しこれを表現する力がある。それは逆に言えば、俳句がもつ「省略」の力のことであって、省略が生む空白の中に、無限に広い世界がある。

④俳句と「微笑み」―共生と平和

第四にパネルは、こうして「最終的に、重要なことは読者に微笑みをもたらせるかどうか」だと言う。この最後の大事なキーワードは、「微笑み」。私たちは、俳句という詩を表現し詠み交わすことで、他者と共にある自分のいのちへの感動を確認するとともに、この感動を他者と共有し共に歓び「微笑む」のである。これこそ「平和」をもたらす「共生」の文学である。

これら四つのポイントからあらためて俳句の本質について考えると、いまなぜ俳句が世界中で求められ広がってきたか、その理由がわかる気がする。

おわりに

こうして俳句こそ、いま一切の他者や万物に互いにふれあい語りかけ「微笑み合う」、「存問」と「平和」の文学である。このような「存在」の触れ合いによって「場」が生まれ、私たちの「生」はいっそう豊かになるだろう。いま、この個人の内面、社会、さらには地球規模での分断、対立、戦争の時代に、このパネルが示唆する「共生と平和の俳句」の意味は大きい。

今、あらためてこの広々と北海を望む国境の村のハイクパネルの文字をたどれば、ここは「近代」の源流であるルネサンス人文主義（ユマニスム）の王であり平和の追求者だったエラスムスの国、ネーデルランド。かつての人文知（ヒューマニティーズ）、例えば人間、理性、自由、平等、寛容、友愛、平和などの「理念」も「知」もない今日の「分断」と「力」の時代に、欧州もまた岐路に立たされている。とは言え、「ハイク」という「微笑み」と共生の文学には、一条のたしかな光がある。

◇　◇　◇

後 記

・６月30日の俳句ユネスコ・HIA 総会より、土井善晴氏の「自然との対話」の講演録を掲載しました。ご参加になれなかった方、ぜひご一読下さい。テープ起こしは、HIA 会員の村上博幸氏にお願いしました。
・HI 誌では、俳句ユネスコ加盟自治体の首長エッセイを連載しておりますが、今号より俳句選評欄の次のページに掲載しております。
・国際俳句協会は、各自治体で開催される俳句大会の後援（名義使用）を受け付けております。
・10月26日（日）に駐日ルーマニア大使館で俳句交流会を予定しております。12ページのお知らせをご覧の上、HIA 会員の方のお申込みをお待ちしております。
・12月１日（月）の第27回 HIA 俳句大会に向けて、国内外より投句が集まって来ております。今号にも投句応募用紙を同封いたしますので、ぜひご応募下さい。締切は９月20日（土）です。
・12月１日の講演は、日本文学者のロバート・キャンベル氏による「俳句と俳諧について」です。ご参加をお待ちしております。

～国際俳句協会（HIA）入会のご案内～

国際俳句協会（旧：国際俳句交流協会）は、1989年12月、現代俳句協会、俳人協会、日本伝統俳句協会の協力のもとに、海外の俳句愛好者との交流と親睦を図ることを目的に設立、以来、俳句を通した国際交流、俳句文化の紹介、機関誌の発行を中心に積極的な活動を続けています。この機関誌は、外務省を通じて海外の在外日本公館に配布されています。
ぜひ国際俳句協会へご入会下さい。

《会費》年額10,000円　（日本国内日本人）
　　年額 US ＄70　（海外在住外国人）

＊会員の方には、HIA 機関誌への投句（投句の翻訳）に加え、当協会主催の会員同士の交流会、海外での俳句交流などに参加できます。

HAIKU INTERNATIONAL No.168

定　価 Price	1,000円（含年会費） 年会費10,000円
発行日 Date of issue	令和７年８月31日 August 31, 2025
発行人	星野高士 HOSHINO Takashi
発行所 Publisher	国際俳句協会 HAIKU INTERNATIONAL ASSOCIATION
住　所 Address	〒162-0843 東京都新宿区市谷田町２-７東ビル７F 7F AZUMA BLDG. 2-7, ICHIGAYA TAMACHI, SHINJUKU-KU, TOKYO 162-0843 JAPAN
電　話 Fax	03-5228-9004 03-5228-9007

表紙書 cover calligraphy	町　春草 MACHI Shunsō
翻訳委員 translator	村上　博幸 MURAKAMI Hiroyuki

送金口座名「国際俳句協会」
ゆうちょ銀行 振替貯金　00190-1-536945
三菱ＵＦＪ銀行 新丸の内支店（普）　1028936
一般会員：１万円
賛助会員　結社、団体：３万円
法人：１口５万円
（何口でも可）

ホームページアドレス　https://www.haiku-hia.com
俳句ユネスコホームページアドレス　https://unesco.haiku-hia.com
協会メールアドレス　info_hia@haiku-hia.com